View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Waseda University Repository

富岡重憲コレクションの別尊雑記断簡について

下野玲子

はじめに

本稿では当館の富岡重憲コレクション（旧富岡美術館収蔵品）の別尊雑記断簡を紹介する。当コレクションの蔵品番号・絵D-6は代表的な密教図像集の一つ、『別尊雑記』の鎌倉時代写本の断簡を軸装したもので、計八幅ある。富岡重憲氏（一八九六～一九七九）がこれらを入手した時期や経緯は不明である(註1)。

『別尊雑記』は心覚（一一一七～一一八〇）(註2)が撰集した図像集で五七巻からなり、一二一の尊法を如来部、仏頂部、諸経部、観音部、菩薩部、忿怒部、天等部に分け、各尊の梵号・密号・種子・三昧耶形・印言などを詳述し、尊像や曼荼羅を白描図像によって示している。心覚は天台の三井寺で出家受戒したが、のちに真言の醍醐寺賢覚、実運らに小野流を受け、さらに高野山成就院で仁和寺より来院した兼意より灌頂を受けて広沢流を学び、広い学識を有していた。そのため『別尊雑記』には、成就院覚助（仁和寺広沢流）の『別行鈔』七巻、勝定房恵什（仁和寺）の『図像抄』一〇巻、勝倶胝院実運（醍醐寺）の『秘蔵金宝抄』一〇巻、同『諸尊要抄』一五巻、同『玄秘抄』四巻、成蓮房兼意の『成蓮抄』二〇巻から先行する四師の説を引用し、註や裏書で本文を補足し、自説も加えている。図は『図像抄』を中心に東台両密諸流や唐本の図像を広範に収録している(註3)。

当コレクションの別尊雑記断簡の内訳は**表1**に示す通り、巻一の三か所、巻十三の二か所、巻三八の三か所である。

表1『別尊雑記』の構成と当館所蔵断簡の該当部分

『別尊雑記』の構成		富岡コレクション該当部分と蔵品番号（いずれも各尊・図のごく一部分）
第一如来部	巻一～六	巻一胎蔵界大日如来（絵D-6-1） 巻一金剛界大日如来（絵D-6-6） 巻一不空成就如来（絵D-6-3）
第二仏頂部	巻七～九	
第三諸経部	巻一〇～一六	巻一三宝楼閣曼荼羅（絵D-6-5） 巻一三菩提場曼荼羅（絵D-6-2）
第四観音部	巻一七～二四	
第五菩薩部	巻二五～三一	
第六忿怒部	巻三二～三九	巻三八隨心金剛（絵D-6-8） 巻三八無能勝・大輪金剛（絵D-6-4） 巻三八歩擲明王（絵D-6-7）
第七天等部甲	巻四〇～四八	
第八天等部乙	巻四九～五七	

『別尊雑記』の翻刻はすでに心覚自筆の仁和寺本（重文指定、ただしうち一一巻は後補）を底本とした全五七巻が『大正新修大蔵経』図像部第三巻（以下、大

正蔵本と略記）に収録されているが、本断簡には大正蔵本にはない頭註や脚註が加えられた部分や巻末の書写奥書が含まれるため、訓点も含めて資料として全文を翻刻し、大正蔵本との異同を掲げる。その後に印と奥書に関する若干の検討を付け加えたい。

『別尊雑記』断簡　翻刻・校註・影印

【凡例】

一、最初に《大正蔵本の巻次》、当館蔵品番号・作品名・法量・大正蔵本該当頁、その他注意書きを記してから本文を翻刻した。

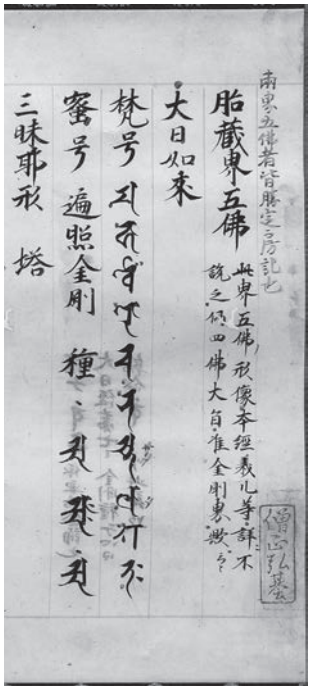
二、翻刻の本文の上段に写真を配置した。

三、本文の配行は原本通りとし、文字の大小も原本通りとすることに努めたが、頭註・脚註の一部は同一ページ内に収めるため改行を／で示した。

四、本文には句点（、）を施した。

五、使用漢字はできる限り底本通り、または近い字体にしたが、次に掲げる異体字については正字体に改めた。

界→界　義→義　等→等　旨→旨　輕→輕　坐→坐
寶→寶　臺→臺　座→座　置→置　閻→閻　檀→檀
薩→薩　像→像　髮→髮　髻→髻　陀→陀　最→最



覺→覺　也→也　衆→衆　淨→淨　飾→飾　歟→歟
遮→遮　節→節　寂→寂　指→指　臍→臍　胸→胸
叢→叢　因→因　臂→臂　尼→尼　瞋→瞋　呵→呵
鬼→鬼　凡→凡　鬘→鬘

六、梵字はローマ字に翻字した。

七、訓点のうちヲコト点は翻刻では省略し、返り点・送り仮名・振り仮名は翻刻した。合字「〆」は「シテ」と表記した。

八、判読不能の文字は□をもって示した。

九、紙継の位置は写真の下部と翻刻下部に「」を付した。

十、㊥は朱筆、㊤は奥書を示し、〔図像〕は白描図像の挿入位置、〔裏書〕は裏書、〔頭〕は頭註、〔脚〕は脚註、〔印〕は押印の位置を示す。朱筆と奥書以外はスペースの関係上、各断簡の本文翻刻の後にまとめて翻刻した。

十一、本文と裏書については、異体字以外で大正蔵本と異なる字には＊を付し、裏書等の翻刻に続けて【校勘】として示した。

《巻第一》

絵D-6-1　胎蔵界大日如来　二九・四cm×六二・二cm（**図1**）

大正蔵本五七頁上、図像は五八頁№一、裏書①は六五頁下裏書一、②は同裏書二　※訓点についてはすべて朱筆のため㊥表記を省略

㊥両界五佛者皆勝定房記也

胎蔵界五佛　此界五佛形像、本經義儿＊1等詳不説之。仍四佛大旨准金剛界歟云々　〔印〕

大日如來

梵号　Ma hā vai ro ca na sta (サタ) thā (タ) ga taḥ　〔裏書①〕

蜜号　遍照金剛　種、a āḥ aṃ

三昧耶形　塔

図１　絵 D-6-1　胎蔵界大日如来

形像　黄金色住法界定印、首戴五佛冠、着白輕羅錦、坐寶蓮華

㊫七集云陽成院本也

後*2本　身肉色着赤衣　或唐本作无所不至印當心

㊫池上頼尊律帥云後入唐義也

疏第四説阿闍梨所観尊相云、観作寶蓮花臺寶王宮殿、於中敷座、〻上置白蓮華臺、以阿字門轉作大日如來、身如閻浮檀紫磨金色、如菩薩像、首戴髮髻、猶如冠形、通身放種〻色光、被綃*3穀衣、此是首陀會天成最正覺之標幟也、彼界諸聖天衆、衣服軽妙、乃至無有銖両、本質嚴淨、不復假以外飾、故世尊俯同其像也

印　無所不至印　五貼印　〔裏書②〕

真言　阿尾羅吽欠（a vi ra hūṃ khaṃ）

胎蔵大日

〔図像〕

〔印〕「高山寺」（朱文単隔長方印）擦消の上に「僧正弘基」（朱文単隔長方印）

〔裏書①〕種子 vaṃ 字　依要略念誦也

大日經第七云、金剛種子心曰、

歸命 vaṃ 文　叶此義歟

〔裏書②〕大日經第三云、尒時毗盧遮那世尊、説降伏四广*4解脱六趣、

満足一切智、〻金剛字句、歸命 a vi ra hūṃ khaṃ 文

【校勘】1義儿→儀軌　2後→後　3綃→絹　4广→魔

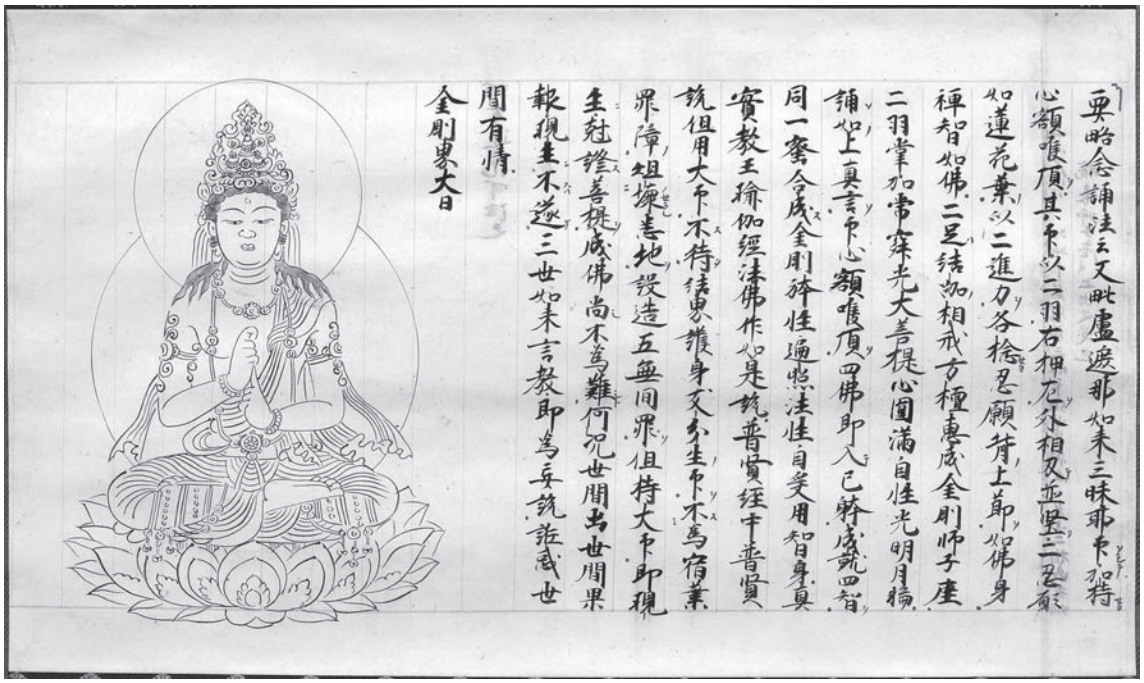


図２　絵 D-6-6　金剛界大日如来

絵D-6-6　金剛界大日如来　二九・四cm×四九・六cm（図２）

大正蔵本六三頁、図像は六四頁No.六、裏書①は七〇頁上裏書七、裏書②は同

中裏書八　※訓点についてはすべて朱筆のため㊥表記を省略

要略念誦法云、又毗盧遮那如来三昧耶印、加持（ヲシテ）（セヨ）〔裏書①〕
心額喉頂、其印以二羽右押左外相叉並（テヨ）*1堅*2、二忍願」
如蓮花葉、以二進力（ヲ）、各捻（セヨ）忍願背（ノ）上節（ヲ）、如佛身、
禅智如佛、二足（ハ）如結跏（ノ）相、戒方檀恵、成金剛师子座、
二羽掌加*3常寂光大菩提心圓滿自性光明月輪
誦（シノ）如上真言（ヲ）、印心額喉頂（ヲ）、四佛即入（テ）已躰、成就四智（ヲ）、
同一蜜合成（ス）金剛躰性遍照法性自受用智身、真
實教王瑜伽經法、佛作如是説、普賢經中普賢
説、但用大印、不待（スタ）結界護身支分生印（ノヲ）、不爲（ス）宿業
罪障（ノ）祖壞（セラレ）悉地（ヲ）、設造五無間罪（ヲ）、但持大印、即現
生尅（ス）證菩提（ヲ）、成佛尚不爲（シ）難（ト）、何況世間出世間果
報現生不遂（ニスハケ）、三世如來言教即爲妄説、誑惑世
間有情〔裏書②〕
金剛界大日

〔図像〕

〔裏書①〕㊥一字儀儿*4ニハ以此印名勝身三昧印、但少異、彼文ニハ名小二指成光焔
腕表师子座文上出文是也

〔裏書②〕盻坐蓮花可注之

【校勘】1並→幷　2堅→竪　3加→如　4儿→軌

図３　絵 D-6-3　不空成就如来

絵D-6-3　不空成就如来　二九・四cm×五九・二cm（図３）

大正蔵本六五頁下、図像は六九頁№一〇

※訓点についてはすべて朱筆のため㊥表記を省略

不空成就如来

梵号　a mo gha si ddhe ta thā ga ta

密号　㊥地金剛　成就、、　業用、、

種子　aḥ　三、　羯磨

形像　金色、左手作拳、當臍、右手五指叙當

胸上

印　施無畏　真言　oṃ a mo gha si ddhe aḥ 唵阿目伽悉弟噁

攝真實經中云、第五結无*1怖畏印、左手如前

私云阿闍左印也 次舒右五指、以掌面向外、入北方不空

成就如来三昧、當観吒字色、及我身盡北方

界并与*2九方无*3量世界諸佛菩薩、一切衆生

山河大地草木叢林、悉皆五色、以何因縁

名無怖畏、謂備四義、偈無怖畏文

不空成就佛　袈裟*4赤色

〔図像〕

「

㊥元亨元年四月十九日以十無盡院之御本

交點之畢　　性然

」

傳領聖通之

【校勘】1无→無　2并与→幷與　3无→無　4裟→沙

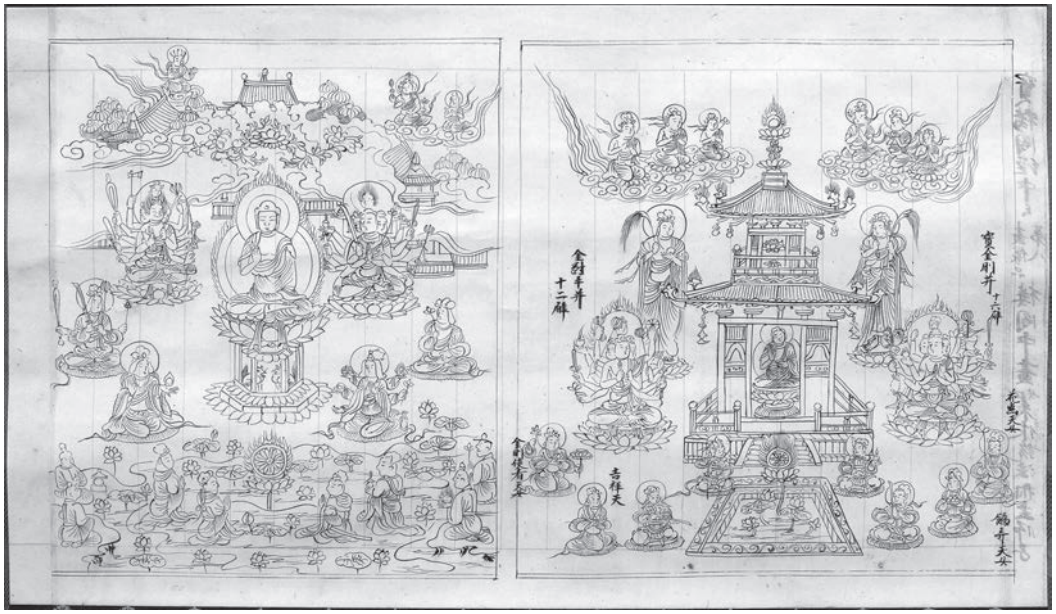


図４　絵 D-6-5　宝楼閣曼荼羅

《巻第十三断簡》

絵D-6-5　宝楼閣曼荼羅二種　二九・四cm×五〇・八cm（図４）

裏書は大正蔵本一六九頁下、図像①は一六五頁No.三八宝楼閣曼荼羅（其一）、図像②は同巻一六六頁No.三九宝楼閣曼荼羅（其二）に相当

〔裏書〕

「

〔図像①〕

花歯天女

寶金剛幷十六臂　　鏑弁天女

金㝡手幷

吉祥天

十二臂

金剛使者天女

〔図像②〕

「

〔裏書〕寶楼閣經中云（畫像品第八）　楼閣中畫如来、作説法相、坐師子

図５　絵 D-6-2　菩提場曼荼羅

絵D-6-2　菩提場曼荼羅　二九・四cm×五九・七cm（図5）

大正蔵本一六九頁上、図像は一七〇頁No.四〇、裏書は一七一頁下裏書八七

三種陀羅尼可滿呪遍等、具可見本経、〔裏書〕

右法引合寶楼閣法可得心也、天女等印明見

彼法、彼此以釈迦、為本尊、其種字三昧耶形印

明。如胎蔵

〔図像〕

北　化佛并也　東

梵夾　金剛使者

金剛手

文殊

吉祥天

西　寶幢　南

㊇元應二年九月廿二日以十無盡院之寫了

正中二年四月六日奉傳受了　□然

〔裏書〕小野仁海僧正抄云

従师口傳授　是并荘厳　前所三真言　能仁所開演

有斯秘明處　是佛全身塔　已成就制底　及諸尊形像

書寫此三明　置之於其内　即同造十方　若人一瞻礼

已瞻礼百千　誦此真言者　是名真身塔　能行佛制底

解語率都婆*1　持明者瞋怒　悪言呵罵人　皆成妙法音

【校勘】

1率都婆→欒覩波

図６　絵 D-6-8　金剛随心菩薩

《巻第三八》

絵Ｄ－６－８　金剛随心菩薩　二九・四cm × 四三・三cm（**図６**）

大正蔵本四九七頁上～中、図像は四九八頁№二二五

※ヲコト点と図像左の訓点の一部は朱筆、それ以外の訓点は墨書

師説*1云、以此印、大咒小咒共可用之ヲ

oṃ ki ri ki ri ba jra ma ra ya ke ri ki ra

唵キリキリ二ハサラ摩羅耶三ケイ雞利繫羅

ya svā hā

耶四莎訶

金剛随心菩薩　以大師御筆見寫之

〔図像〕

金剛随心擲鬼法印第四十二　誦前小心咒

〔頭〕以右手无名指ヲ、共*2大指相捻向上ニ、擲手即ヨヲ成擲印ヲ、

金剛随心輪法印第四十三　誦前小心咒

平右手掌ヲ向下ニ、摩病人頭上、成輪印

金剛随心稍法印第四十四　誦前小心咒

〔頭註〕本抄左

【校勘】1説→（無）　2共→與

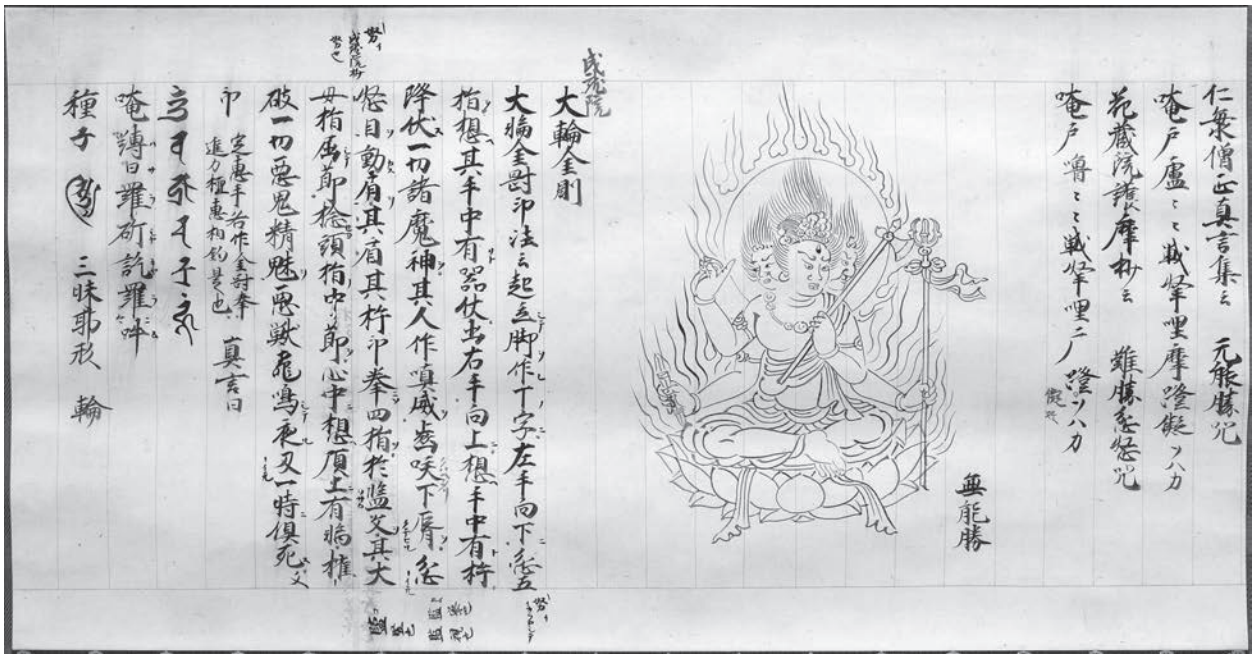


図7　絵D-6-4　無能勝・大輪金剛

絵D-6-4　無能勝・大輪金剛　二九・四cm×五六・七cm（図7）

大正蔵本四九九頁中、図像は五〇〇頁No.二二六。裏書は大正蔵本では一行目にあるが当断簡にはなく、当断簡の裏書は大正蔵本に該当文なし

仁衆僧正真言集云　无能勝咒

唵戸盧ゝゝ戰拏哩摩蹬儗ソハカ

花蔵院護摩抄云　難勝忿怒咒

唵戸嚕ゝゝ戰拏哩广蹬○ソハカ

無能勝

〔図像〕

大輪金剛（成就院）

大輪金剛印法云、起立脚作丁字、左手向下忿五指、想其手中有器杖、出右手、向上、想手中有杵、降伏一切諸魔神、其人作嗔威、齒咬下脣、忿怒目動肩*1、其眉*2、其杵印拳四指、於監文、其大

〔裏書〕

〔図〕

〔脚①〕

破一切悪鬼精魅悪獣飛鳴夜叉一時俱死

印（定恵手各作金剛拳 進力檀恵相鉤是也）、真言曰

om va jra ca kra hūṃ

唵薄曰羅斫訖羅合吽

種子　sitrya　三昧耶形　輪

〔頭註〕努ィ／成就院抄／努也

〔脚註①〕努ィ／イカラカシテ

〔脚註②〕盬　堅也　監　察也／監　視也

〔裏書〕次頁参照

【校勘】1肩→眉　2眉→肩

〔裏書〕於（イル）監（和名書云、ヲサム　カヽミル）
□之四指ノ内印文堅クニキテ不見故ニヲサムト
ヨム其義可□歟

於監
㊥イレヲサムトヨムヘキ歟

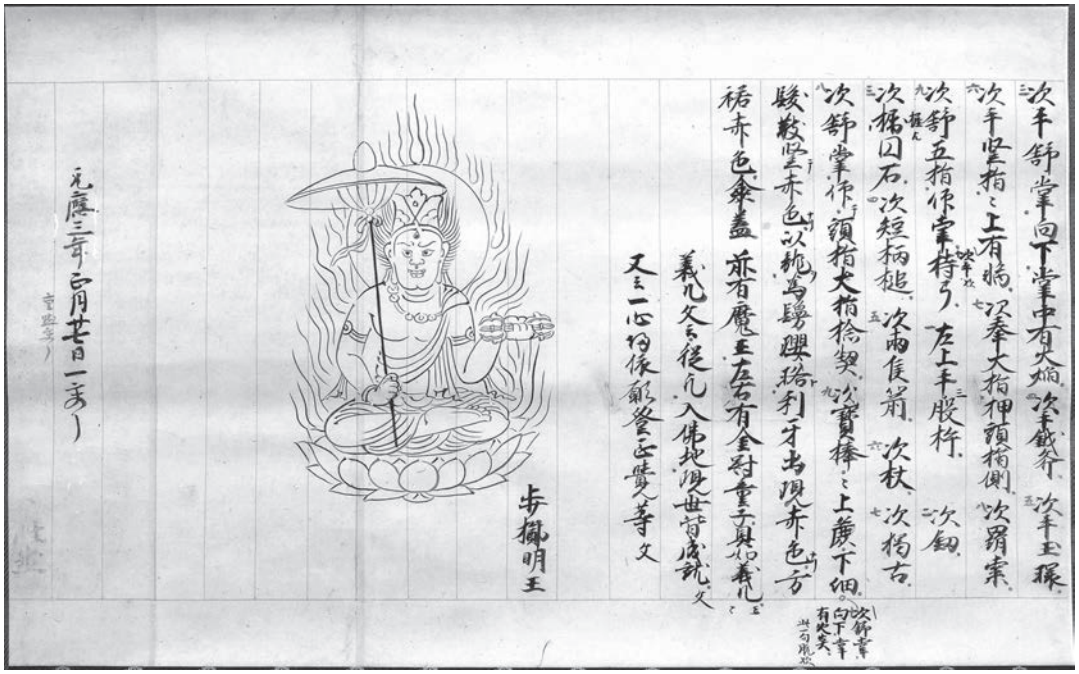


図８　絵 D-6-7　歩擲明王

絵Ｄ－６－８　歩擲明王　二九・四cm×四七・三cm（図８）

大正蔵本五〇二頁中、図は五〇三頁№二二八に相当

※ヲコト点と左側の漢数字は朱筆、それ以外の訓点は墨書

次手舒掌向下掌中有火焔、次手鉞斧、次手玉環、
次手竪指〻上有輪、次拳大指押頭指側、次羂索、
次舒五指仰掌○持弓、左上手○股杵　次劒、
次掘*1円石、次短柄槌、次兩隻*2箭、次杖、次獨古、
次舒掌仰、頭指大指捻契、次寶棒、〻上麁*3下細○、〔脚〕
髮散竪赤色、以龍爲鬘瓔珞、利牙出現、赤色、方
裙赤色、傘蓋前有魔王、左右有金剛童子、具如義几*4云〻
義几*5文云、從凡入佛地、現世皆成就文
又云、一心帰依、願登正覺等文

歩擲明王

〔図像〕

㊤元應三年正月廿七日一交了
㊥重點交了
性然

〔脚註〕次舒掌／向下、掌／有火炎、／此一句脱歟

【校勘】1掘→握　2隻→候　3麁→廉　4几→軌　5几→軌

奥書と印について

以上の当館コレクション『別尊雑記』断簡のうち、最初の三点は巻第一（両界五仏）から取られた三部分で、絵D-6-1胎蔵大日が全巻の冒頭部に当たり、ここにだけ押印が認められる。ただし、「高山寺」印を擦り消した上に「僧正弘基」印を捺している（**図9**）。次の絵D-6-6は胎蔵界五仏に続く金剛界五仏の大日の末尾部分である。絵D-6-3不空成就如来は当巻の巻尾を含み、元亨元年（一三二一）四月十九日に十無尽院の御本をもって交点し畢ったとの識語がある。その下方に奥書より大きく「性然」と署名があるが、水で暈して消してある（**図10**）。

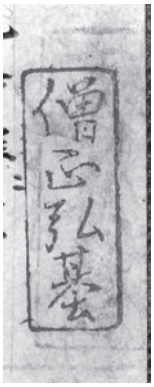


図9
巻1巻朱印

図10
巻1署名

図11
巻13署名

図12
巻38署名

巻第十三は大正蔵本によれば宝楼閣に始まり菩提場まで九つの経法を収めるが、図像は宝楼閣曼荼羅二種と菩提場曼荼羅の二か所のみである。コレクションの二幅絵D-6-5と同2はちょうどこの図を中心とする部分だけを切り取ったもので、奥書に元応二年（一三二〇）九月二十日に十無尽院の御本を以て写し、正中二年（一三二五）四月六日に伝授したとある。奥書の下に本文・奥書より大きな文字二文字を水で暈かして消してあり、判読は困難だが、残る痕跡からはおそらく巻一、巻三八と同じく「性然」と推測される（**図11**）。

巻三八は元来、円満金剛以下六尊を収めるが、図像は隨心金剛・無能勝・大輪金剛・歩擲の四尊のみである。絵D-6-8はそのうち隨心金剛の図を含む中間部分、絵D-6-4は無能勝の図を含む末尾と次の大輪金剛の冒頭部分、絵D-6-7は歩擲明王の図を含む巻末部分である。巻末には元應三年（一三二一）正月二十七日に一校した旨の奥書と、擦り消された文字「性然」が残っている（**図12**　コントラストを強調）。

『別尊雑記』は仁和寺本の他に鎌倉時代や江戸時代の写本が数か所に現存しているが、真鍋俊照氏等の研究によれば時期の早いものは、東寺観智院金剛蔵本（平安時代）六帖、唐招提寺本（永仁六～七、正安元年）四巻、仁和寺蔵本（了厳本、乾元元～嘉元二年）三四巻、東寺宝菩提院本（元応二年～元亨二年）一七巻（ただしうち三巻は個人像）があるという(註4)。このうち東寺宝菩提院本の現存する巻は、真鍋氏によればかつて個人像であったが昭和四三年一一月に復帰したといい、その奥書が同氏の論文の註に列挙されている。これによると、奥書の年代は正応二年（一三二〇）から正中二年（一三二五）まであり、この間に書写・点交あるいは伝受したもので、「僧正弘基」印を有するものが多い。また、「性然」の署名が散見される。同氏の論文註に掲載されている第二七巻（普賢）の奥書の写真を見ると筆跡も近いと思われる。また、真鍋氏の別の論考で東寺本として紹介されている『別尊雑記』巻三一（不動）も、奥書部分の写真によれば、「元應二年六月廿四日以十無盡院之御本點交了」とあり、その次の行に擦り消されたと思しき薄い「性然」の文字が確認できる(註5)。これも宝菩提院本中の一巻と考えられる。したがって、奥書の年代の範囲、高山寺塔頭「十無尽院」の本を校合に用い、「性然」の署名（ただしいずれも消されている）を有すること、「僧正弘基」の押印という共通項から、当コレクションの断簡はいずれも東寺宝菩提院本の一部分とみてよいだろう。以上の奥書情報を紀年の早い順にまとめたものが**表2**である（★は当コレクション断簡、＊は真鍋氏の論考により追

加。※の「性然」は別の写真図版(註6)から読み取った)。当コレクションが宝菩提院本の残欠の可能性があることはすでに富岡美術館所蔵品であった時から浅井京子氏によって指摘されているが(註7)、本稿ではそれを追認するかたちとなった(註8)。

なお、性然については『続群書類従』第二六輯下に収録されている「大治二年曼荼羅供次第」の奥書にもその名がみえ、それによるとまず正応六年(一二九三)五月下旬頃に方便智院の御本をもって経弁という人物が書写し、それを元亨三年(一三二三)十二月九日に他人に写させ、「法印性然」自身が十無盡院の御本をもって校合したといい、この時年齢を五十四と記している(註9)。

管見の限り、宝菩提院本『別尊雑記』についてはこれまで高山寺との関係は特に取り上げられてこなかったようである。しかし、当コレクションの巻一巻頭に「高山寺」印(五・二×一・六cm)(註10)の痕跡があり、さらに奥書に頻出する「十無尽院」は栂尾高山寺の塔頭であり、先述した「大治二年曼荼羅供次第」写本奥書にも十無盡院に加え方便智院という高山寺の塔頭の名が見えることから、「性然」は高山寺の僧であった可能性が高い。したがって、これらは高山寺内で書写され、ある時点までは高山寺で所蔵されていたと考えられる。ただ、従来知られている「高山寺聖教目録」などの高山寺の目録類には見当たらない(註11)。

また「高山寺」印を消した上に捺されている「僧正弘基」印(四・三×一・五cm)については、智積院の三十世となった弘基(一七五二～一八二二)が僧正であった江戸時代十九世紀初め頃に捺されたものと推測される(註12)。真鍋氏の論文註によれば宝菩提院本『別尊雑記』のほとんどの現存する巻に同文の朱印が捺されており、巻三二不動の冒頭の写真にも同印が認められるので、宝菩提院本は少なくともこの時期までは一括して保管されていたのではないだろうか。「高山寺」印と奥書の「性然」は「僧正弘基」印を捺すときに消した可能性が考えられるが、伝来の詳細については東寺宝菩提院本原本の調査を含め、今後の課題としたい。

表2『別尊雑記』宝菩提院本および当館所蔵断簡の奥書

巻次	表題	奥書
一〇	法華経	元応二年(一三二〇)六月十五日点交了 正中元年(一三二四)十二月廿五日奉伝受了
三二＊	不動	元応二年(一三二〇)六月廿四日以十無盡院之御本点交了／性然
三六	転法輪菩薩・鎮壇	元応二年(一三二〇)七月九日以十無盡院之御本交点了
四三	水天	元応二年(一三二〇)七月廿二日以十無盡院之御本交合了／(朱筆)後日加点了
五一	大黒天神・深沙	元応二年(一三二〇)八月十三日以十無盡院之御本交点了／性然※
四九	蘘虞梨童女・加楼羅	元応二年(一三二〇)九月十三日以十無盡院之御本交点了／性然
一三★	宝楼閣・菩提場等	元応二年(一三二〇)九月廿二日以十無盡院之御本写了／正中二年(一三二五)四月六日奉伝受了／□□(性然)
二七	普賢	元応二年(一三二〇)九月廿八日以十無盡院之御本写了／□□(性然)
三〇	随求	元応三年(一三二一)正月廿七日以十無盡院之御本写了
三八★	円満金剛・歩擲等	元応三年(一三二一)正月廿七日一交了(朱筆)重点交了　性然
一★	両界五仏	元亨元年(一三二一)四月十九日以十無盡院之御本交点之畢　性然
九	金輪・熾盛光	元亨元年(一三二一)五月五日交点了 正中二年(一三二五)十二月八日奉伝受了
一二	童子経	元亨元年(一三二一)五月十五日以十無盡院本写了
一八	如意輪	元亨元年(一三二一)七月十日移点畢
四五	吉祥・□□	元亨元年(一三二一)七月廿三日交点了
四〇	北斗本	元亨元年(一三二一)八月十三日以十無盡院之御本写了
四一	北斗末	元亨元年(一三二一)八月十三日点交了
五三	摩利支天	元亨元年(一三二一)十月十四日交点了
五七	神供次第…	奥書欠
二四	多羅、毗倶胝、勢至	奥書欠

註

（1）表具は八幅すべて同じ仕様で、絵D-6-2菩提場曼荼羅は箱蓋表に「図像抄〈宝楼閣〉」、裏に「図像抄巻末墨書有之　田山方南敬題」の墨書、絵D-6-7歩擲明王は箱蓋表に「歩擲明王図」、裏に「図像抄〈原巻墨書／元應三年書写　正中二年傳受〉」の墨書があり、二幅とも同一人の筆跡と思われる。田山方南（一九〇三～一九八〇）は文部省国宝監査官を務めた人物である。

（2）没年については治承四年（一一八〇）の他に寿永元年（一一八二）説もある。

（3）真鍋俊照「心覚と別尊雑記について―伝記および図像「私加之」の諸問題―」（『仏教芸術』七〇、一九六九年三月）、のち真鍋俊照『密教図像と儀軌の研究』上（法蔵館、二〇〇〇年）に再録。

（4）註3真鍋論文参照。ただし、東寺観智院金剛蔵本の時代と数量については東寺宝物館編『東寺の密教図像―形像の相伝―』（東寺宝物館発行、一九九九年）図三三解説に従った。

（5）真鍋俊照「「別尊雑記」の図像学的背景」（『成田山仏教研究所紀要』三、一九七八年一〇月）図9、のち真鍋俊照『密教図像と儀軌の研究』上（法蔵館、二〇〇〇年）に再録。

（6）註3『東寺の密教図像―形像の相伝―』図三四に深沙法の奥書が掲載されており、これによった。

（7）当館に移管された富岡美術館蔵品カードの書き込みによる。

（8）ただし、註6『東寺の密教図像―形像の相伝―』図三四には「一四巻の内三巻」（転法輪印菩薩法、吉祥天女供養法、深沙法）が掲載され、解説では宝泉院に伝来するものとして紹介されているため、東寺における原所在地についてはさらに検討することとしたい。

（9）奥書は以下の通り。「正應六年五月下旬之頃。以方便智院之／御本書寫之畢。　經弁記之。四十八。／元亨三年十二月九日。以他人令寫了。／自交合之御本者。十無盡院之御本也。／法印性然。五十四。」『続群書類従』二六輯下釈家部（続群書類従完成会、一九二五年初版）、一五七頁。

（10）この寸法は奥田勲氏が紹介している高山寺の聖教に押されている六種の「高山寺」印（1三・九×一・八 字高三・六、2四・〇×一・八 字高三・一、3四・三×一・八字高 三・七、4四・四×一・八 字高三・七、5四・六×一・七 字高四・四、6四・七×一・七 字高四・四）のどれより縦が長く、今後同じ押印を確認する必要がある。奥田勲『明恵：遍歴と夢』（東京大学出版会、一九七八年）二三七～二三八頁参照。

（11）高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺経蔵古目録』一九八五年、『高山寺経蔵古目録』二〇〇二年、東京大学出版会、参照。

（12）村山正榮氏は『智積院史』弘基の項で墓誌を引用し、乙亥年の春に幕府より本山主職に補せられ、秋に権僧正となり、翌年僧正となったと記す。これによれば弘基は文化一三年（一八一六）から僧正であるが、その後で「編者云く」として文化二年（一八〇四）三月廿四日本山住職仰付られ、同年八月廿四日権僧正に任じ、同十年（一八一三）二月二十日僧正に転ずと付記しており、弘基の僧正任期についてはなお考究を要する。村山正榮『智積院史』（弘法大師遠忌事務局、一九三四年）第三編列祖伝、第三十世弘基僧正、七三～七四頁参照。